全電源喪失の記憶

証言　福島第1原発

■第4章「東電の敗北」

6

爆発映像に人だかり

避難所で飛ぶ罵声

「こんな事故起こしやがって」「どうしてくれる」。福島第1原発3号機の爆発を伝えるテレビの前に人だかりができていた。3月14日、住民の避難所となっていた県農業総合センター（郡山市）で、東京電力の自衛消防隊隊長小川広幸(50)はその光景を離れて見ていた。

小川は12日に1号機原子炉建屋が爆発した際、陸上自衛隊の消防車に同乗していて、飛んできた鉄骨で左腕を骨折した。

「テレビに近づく勇気はありませんでした。大変なことを起こしてしまったと申し訳なくて、本当につらかったです」

▲郡山市の避難所で、福島第1原発の事故を報じるテレビの前に集まる避難住民＝2011年3月16日

爆発で重傷を負った小川は同僚が運転する車で、川内村に運ばれたが、医師から「完全骨折していて、ここでの治療は無理だ」と言われた。小川は同僚と別れ、救急車で郡山市の総合南東北病院に向かった。

病院到着は12日午後10時ごろ。断水で手術ができない状態だったが、腕にギプスを付けてもらい、診察室で少し横になることができた。

周囲の騒がしさで目を覚ました。看護師が「浜通りから患者さんがたくさん来ています。小川さんは命に別条がないので避難所に行ってください」と言う。

小川は受付で電話を借り、東京にいる妻に「爆発で骨折したが治療はまだだ。これから避難所に行く」と告げた。日付は13日になっていた。

約5キロを歩き、郡山総合体育館で放射性物質が付着していないか身体サーベイを受けた。東電の青い作業服や靴は汚染されていて処分された。不織布のパンツだけになった小川は、渡された毛布2枚を体に巻き付けた。

はだしで毛布を巻いただけの小川は13日午前、救急車で県農業総合センターに運ばれた。ここで衣料品店が提供したジャージー上下、下着、サンダル、ジャンパーをもらい、14日にテレビの前の人だかりを見たのだ。

この日は、東京にいる娘からセンターに電話がかかってきた。娘は郡山市内の避難所に片っ端から電話をかけて小川を捜したのだという。

「羽田行きの臨時便を予約したから乗って」

全日空が仙台空港閉鎖に伴い福島空港発着の臨時便を運航していた。運賃は娘が事前に決済してくれた。小川は一文無しだった。空港までどうやって行けばいいのか。

「送りますよ」。センターの男性職員が声を掛けてくれた。途中でパンとペットボトルのお茶を買ってもらった。

「本当にありがたかったです」。14日午後8時前、ジャージーにジャンパーを羽織り、サンダル履きで羽田空港に降り立った小川を、妻と娘、息子が迎えた。腕の手術を受けることができたのは1号機爆発から3日後の15日だった。（敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信　高橋秀樹）